

もう一つの長征

——1935年前後の白区における中国共産党の挫折と再生——

福 本 勝 清

序文

1934年秋、国民党の大攻勢に耐えきれなくなった中国共産党と紅軍は、活路を求め南方の各根拠地を撤退、新たな根拠地の形成を目指して、西遷を開始した。いわゆる長征の開始である。10月下旬、中央根拠地（江西）を後にした長征部隊（紅軍第一方面軍）は中国西南部を大きく迂回、国民党軍の追撃をかわしながら北上を続け、1935年10月、ついにその一部は西北に残された根拠地、陝北根拠地に辿りついた。そこにおいて毛沢東に率いられた中央紅軍は、前年11月に鄂豫皖地区を出発し、陝西南部を経て9月に陝北に入っていた紅軍第二十五軍、及び陝甘、陝北の土着紅軍、第二十六軍、第二十七軍と合流した。この根拠地が、抗日戦争、国内解放戦争を通して革命の中心地となる陝北根拠地であった。その一年の後、各地の紅軍も次第に西北地区に集結し、きたるべき日本軍の中国への全面的な侵略に備えることになる。

中央紅軍に先立ち、湘贛地区を出発した紅軍第六軍団は、中央紅軍主力の先遣部隊として、江西、湖南、広西各省の省境山岳地帯を進み、湖南、四川、貴州の交界地区で、賀龍軍（紅軍第二軍団と改称）と合流。翌年（36年）11月、両軍団は第二方面軍と称して湘鄂川黔地区を出発、36年7月には、朱徳など中央紅軍残留組をまじえた張国燾らの第四方面軍と合流し、さらに北上を続け、ついに10月10日、甘肅会寧に到着、出迎えた第一方面軍と会師する。二年余の苦闘を経た紅軍の三大主力は合流した。すぐ後に西路軍の悲劇が続いたとはいえ、長征はここに終了したのである。

言うまでもなく、中国共産党にとってだけではなく、中国現代史、ひいては二十世紀の世界史にとっても、長征は重大な出来事であり、エポック・メイキングな、歴史を造りだす運動であった。

この1934年秋から1936年秋にかけての2年間に中国共産党史のうえで長征期と呼ぶことができよう。この2年間の歴史は、27年国共分裂以来、長期に渡って営んできた南方根拠地が崩壊し、革命運動が新たなスタイルで再建される過程にあたる。国民党の圧倒的な政治・軍事攻勢と、王明路線と呼ばれる第三次極左路線の執行による革命運動の内部崩壊から、35年当時、中共は培ってきたソビエト区のはほとんどを放棄せざるをえず、白区（国民党支配地区）の党組織のはほとんどを失ったと言われている。この革命運動の再建において、長征は大きな役割を果たした。その意義は中国現代史において不滅である。それは何よりも、この長征において、毛沢東が中国の党と紅軍の最高指導者として登場したからであり、またこの苦難の長征において鍛え抜かれた党と軍隊が、その後の革命の支柱になったからである、と。

このような言い方は、すでに数十年にわたって言い慣らされてきた。これは真実である。だが、当時の革命運動の再生は長征によってのみ達成された、そのことは揺るぎない絶対の真実であるというのは、他の形態での革命運動の発展可能性を全て無視することによって、ようやく言うにすぎない。毛沢東は『新民主主義論』（1940年）において、三十年代の国民党の革命に対する攻勢を二つに分け、軍事的な包囲討伐の結果は、紅軍の北上抗日（長征）に、文化戦線における封じ込めの結果は、「一二・九」運動の爆発にいきつい

たと述べ、長征と白区における抗日学生運動を同列にしている。ところが、『連合政府を論ずる』（1945年）においては、長征も「一二・九運動」も、ともに中共の指導のもとに実行されたとされているが、この長征の間に党は新しい情況に適応した政治路線、抗日民族統一戦線の樹立を決定し、その闘争目的にそって「一二・九運動」が発動されたと読めるように記述されている。この二つの文献の間に5年の歳月が流れているが、この5年間に長征期における長征中の紅軍部隊の闘いと、「一二・九運動」に代表される白区の闘いの間に序列が敷かれ、前者の優位が動かぬものとされたことがわかる。つまり1930年代後半においては、けっして長征だけが革命運動の再生の功績を一人占めしていたわけではないことが了解されるはずである。長征の抜きん出た功績というのは、四十年代前半に、ある必要から次第に形づくられていった一つの神話なのである。

実際には果たしてどうであったのか。これは史実を踏まえて検証してみるほかはないのである。理念や思い込みから出発したのでは、つねに既成の枠組みに絡め捕えられ、史実が史実として姿を現さないことになる。

では、ここでいう党の再生にあたって、脱却しなければならなかった極左路線（具体的には第三次極左路線、すなわち王明路線）とは何であったのか、問題となる。

それはまず、戦略・戦術上の冒険主義、もしくは盲動主義であった。革命運動の現実や党の組織力量にそぐわぬ過大な闘争目標に向け、党員、団員、労働組合員、農民大衆を駆りたてた。ゼネストとか、武装蜂起が、成功の見込みもなく幾度となく試みられ、犠牲者を増やしていった。都市では、左翼サークルのメンバーまでもが、飛行集会やデモンストレーションに駆り出され、網を張って待っていた軍警の餌食となった。これらの損失にも拘らず、指導部の総括はきまって「政治的に

は大きな影響を与えた」とか、「敵に打撃を与えた」といった決まり文句ですまされ、勝利の度に味方を失っていくというパターンが続いた。

次に、党組織の硬直化、民主的作風の喪失であった。すでに党は、30年前後から、上部の命令に対しては、下部党員は反対意見を保留することも難しくなっていた。四中全会においては、コミンテルン代表ミフの後押しで、王明など留ソ派が党中央を篡奪した。その後党内では、上部の命令に対する如何なる躊躇も反中央、反コミンテルン路線の現れとして打撃の対象となった。命令主義、懲罰主義的指導が横行し、中間指導者層は単なる命令の伝達器にならざるをえなくなった。

そこでは様々な党内矛盾があたかも正しい路線と間違った路線の闘争であるかのように誇大に取り扱われ、「二つの路線の闘争」という口実のもとに、誤った者（すなわち上部より批判された者）に対する情け容赦のない打撃が盛んに行われた。誤った同志に対する容赦のない仕打ちは、革命家としてのあるべき作風やポリシェビキ的精神であるかのように呼吹され、党内に蔓延した。党はすでに虐げられた人々の集団としてのやさしさを失っていた。党は弾力性を失い、見掛けだけの大言壮語や教条主義的な言辞が罷り通るようになった。

百パーセントのポリシェビキを自称するモスクワ帰りの若い党員たちとともに、指導部に抜擢されたのは、労働者出身の幹部であった。20年代後半以後、出身階級を過度に重視し、その他の要素を軽視する、「唯成分論」が横行し始める。明らかに硬直化しつつあったソ連社会内部における、階級情勢の激化からの影響であった。能力の如何に拘らず、労働者出身の革命家が幹部に抜擢されるようになり、その反対に、地主、富農、ブルジョア家庭出身の党員（当然にもそのほとんどがインテリゲンチアであった）は、それまでの実績や貢献に拘らず、ことある度に批判や打撃の対象になっていた。階級的に純粹であることが尊ばれ、複

雑であること、曖昧であることは忌避、排除の対象となった。単純な善悪二元論や純・不純による区別が、思考や指導にとって替わった。

また、大衆運動の軽視も無視できない誤りであった。革命闘争が地道な日常闘争から切り離されたため、経済闘争や合法闘争が工作上軽視される結果となった。あらゆるものが非合法闘争や秘密工作となったため、大衆との接点さえ失われがちとなった。また、傘下の労働組合、文化サークルにまで、非合法活動を押し付けたので、進歩的であるが、まだ覚悟を決めていないシンパ層が党に近づくことを難しくしたばかりか、参加したばかりのメンバーに適度な訓練を施すことさえできなくなってしまった。これらは、いずれも党が内側から大衆に対して鍵をかける結果となった。また、大衆組織を党と同じような活動家集団（所謂「第二党」化問題）にすることは、大衆運動に足かせをはめることになり、逆に国民党の側からの組織形成を許してしまうことになった。

さらに、中間派に対する党の姿勢が誤りに満ちていた。これはコミンテルンの中間階級主要打撃論の受け売りが大きな影響を及ぼしているが、偏狭な左翼運動にありがちな、味方でなければ敵といった、単純化された思考によってもたらされている部分も無視できない。国民党独裁に反対する鄧演達の第三党や抗日部隊として名高い十九路軍の首領たちなど、蔣介石独裁に反対する中間勢力や国民党内の諸グループに対して中共は、それらを人民を欺き、現体制の支配を延命させるもの、反国民党、反蔣介石を主張するがゆえに、もっとも危険な敵として、悪罵を投げつけ、共闘を頑に拒み、革命運動から排除してきた。それが、結局、蔣介石独裁の成立と強化を助け、南方根拠地の喪失に貢献したのであった。中間派に対する嫌悪は、単に中間政党や政治集団に対してばかりではなく、中間層に対してまで及んでいた。中共の支持層として長く都市の地下運動を支えてきた都市インテ

リは、つねに中共指導部の軽侮の対象であった。

最後に民族問題の軽視があった。コミンテルン型の革命論からすれば、全ては階級闘争によって決定されるべきことであった。民族問題も階級問題に解消されるべき問題であり、如何に日本軍が「満洲」（東北）を占領しようと、それによって抗日の課題（民族問題）が階級闘争の課題にとってかわることはできなかった。つまり、抗日という課題のために、国民党との間で、日本帝国主義の打倒をめざす抗日民族統一戦線をつくりあげることは、党のこれまでの路線からの逸脱であった。

さらにここでは極左路線なるものを具体的な例を通して説明したい。

1) 勇余は天津の共青团で工作していた。ある時、リーダーが彼を工場に派遣し、ストライキをおこさせようとした。スト開始後、反動当局は軍警を派遣し、工場を包囲、勇余は工場に入ることができなくなった。リーダーは「たとえ殺されても入りこめ」と命じた。怒った勇余は、そのリーダーに一発食らわせ、上海にやってきた。

32年、斉速が上海反帝大同盟で工作していた時、南市（中国人街）の福昌公司前で反日デモを行なう予定であった。だが、当局はすでにそれを探知し、私服刑事らをはりこませ、デモ隊を待ち構えていた。その時指導者の一人王客は、敵と味方の力の差が四対一であることを見て、ただちにそのデモを取り止めた。4人で1人を捕まえることは容易だからであった。斉速が王客のような指導者こそよい指導者だということ、勇余もそれに同意し、王客の判断を誉めた⁽¹⁾。

2) 四中全会（1931年1月）以後、党中央は互済総会主任戴曉雲が前年、李立三路線を執行したとして彼を解任、且つ除名処分にした。戴は党籍の保留を要求したが、中央は受け入れなかった。当時、互済総会で工作していたト有余と黄静文は互済総会の責任者潘梓年に、戴曉雲が李立三路線を執行したのはそれが党中央の路線だったからで、

党籍を残すべきではと意見を出したが無駄であった。戴は除名にあった後、苦しみ、焦り血まで吐いた。トと黄が彼を見舞い、その様子を潘梓年に報告したところ、潘は中央に除名された人間を見舞いに行ったことを批判し、二人はその後見舞いにもいけなくなった⁽²⁾。

3) 1932年上海事変の後、上海反帝大同盟（中共指導下の反帝大衆組織、略称上反）は、人力車夫は最も生活が苦しく、英仏帝国主義が施設した公共バスと電車で客を奪われ、それを最も憎んでいるので、彼らを煽動しバスや電車を破壊すれば、必ず全市的規模の反帝闘争が盛り上がると判断、林立と趙（留ソ派）を車夫居住区のスラムに派遣した。彼らの活動により、人力車夫たちは立ち上がり、ただちに行動に移った。彼らは早朝、人気のないところで始発のバスと電車を待ち伏せ、石で襲い、幾つかの路線のバスと電車を止めることに成功した。だが、その勝利も最初のうちだけであった。工部局（租界当局）の監視が強まり、巡捕（巡查）が見張るなかでは、多数の逮捕者を出し、身動きがとれなくなるだけであった。車夫たちが逮捕された家は、生きていくことさえ難しくなった。

上海反帝大同盟の党のフラクシオン内部で、この闘争に対する討論が行われたが、趙は車夫の闘争は勝利であり、大きな収穫があったとし、これを基礎に全市の暴力闘争を發動しようと提案した。それに対し経験豊かな活動家であった鄭成明は、車夫たちの公共バスや電車への敵意は、狭いギルド思想であり、このような政治的方向性のない、孤立した闘争は大衆の要求から遊離したものだとして反対意見を述べた。だが、鄭の意見は、党フラクシオン書記洪と趙から、革命に対する悲観や失望の表れであり、右翼日和見主義であると批判を受ける。彼はさらに党中央からは中央の精神に合わずと断定され、それに勢いを得た趙から党中央の反帝闘争路線に反対したと批判されたあげく、ついには

党フラクシオンのメンバーから降ろされ、書面審査を受けることになった。当時上海党内部では、反「二面派」闘争が展開されており、多くの知識分子出身の党員が二面派として批判を浴びていた。鄭にはその後も、改組派、右翼日和見主義として、情け容赦のない打撃が浴びせられた⁽³⁾。

4) 胡允恭（胡萍舟）が山東省委書記であった31年9、10月頃、李竹声（中共臨時中央のメンバー）は交通員に陶良夫婦を上海から山東に送らせ、胡に陶良夫婦を外県に送り生き埋めにするように命じた。理由は彼らがトロツキストの疑いがあるからということであった。陶良（留ソ経験者）と中学時代の同学であった胡は躊躇し、二人を再度上海に送り返した。山東軍閥韓復榘でさえ公然と女性共産党員を殺害することははばかったくらいであったから、確実な証拠もなく女性同志を殺したりすると、党内にどんな波紋が起こるかもしれないからである。ソビエト区において、大権を掌握した張国燾や張昌浩などが粛清に名を借り、多数の幹部を殺害したが、胡允恭は白区においてもこのような「嫌疑者」の処刑が行われていた可能性を示唆している⁽⁴⁾。

5) 1936年4月、上海工会聯合会の戴曉雲（非党員）が日系紡織工場工作委員会主任張維楨のところへやってきて、メーデーにデモを決行するように命じた。張がたった8、90人しか動員できないのでやれない旨を言うと、戴は自分が埠頭労働者300人を連れてくるがどうだと言い、張は同意した。だが当日、日系紡織工場の労働者百余人を動員して待っていた張らの前に現れたのはわずか2名の埠頭労働者であった。デモは勿論できなかった。だが、翌日会議を招集した戴は、張は敵前逃亡を企てたと非難し、彼を除名しようとした。且つ戴は、百余人も集まったならば、必ず旗を立てデモを行わなければならない、たとえ全員が逮捕されたとしても、政治的意味において非常に偉大なのだと言ってのけた。工作委員会のメンバー郭

光洲が張の処分は同意しなかったもので、処分はとり止めになった。

戴曉雲は今度は郭光洲に、「五・九」（対日二十一ヶ条条約受諾の国辱記念日）に再びデモを行うよう手配せよと命じた。5月9日が月曜日だったので、張維楨が5月8日に行うように提案、郭も同意した。当日、百人余を集め大会が行われた。その日の午後、やってきた戴は、郭光洲を批判して曰く、繰り上げて挙行するというのは、政治的武装解除であると⁽⁵⁾。

6) 1931年9月18日、日本帝国主義は「満洲」に対する侵略戦争を開始した。東北侵略に対する国際世論の批判をそらすため、上海において事件をデッチあげた日本軍は、32年1月28日、居留民の保護と中国人民の反日活動の鷹慙を口実に、上海に上陸する。だが、その時上海に駐屯していた国民革命軍第十九路軍は、日本軍に激しく抵抗し、常勝日本軍の神話を打破、大いに中国人の抗日意識を鼓舞した。

だが、当時、中共中央は「九・一八」以後、全土を覆った抗日運動の高まりを、革命の到来を告げるものとして見なし、より強力に反政府運動を推し進めようとしていた。また一躍抗日戦の英雄となった十九路軍指揮官に対しても、批判の矢を射ようとしていた。中共の兵士運動は、「兵士は要るが、士官は要らぬ」であり、分隊長とか小隊長のような下士官ですら排斥の対象となった。彼らは何香凝（廖承志の母）が運営している傷兵医院に同志を派遣し、兵士工作に当たさせたが、その工作は、士官と兵士を分裂させ、対立させるものであった。兵士工作の影響により、病院内の十九路軍の士官と兵士の間の矛盾が深まり、緊張が高まっていった。

当時十九路軍の首領であった陳銘枢は、傷病兵の慰問のため夫人を何香凝の病院へ赴かせた。陳夫人は傷病兵全員に対し、その階級に応じて慰労金を与えたところ、兵士工作のために病院に入り

込んでいた党员が、上下の差をとらえ、兵士を煽動したため、士官と兵士たちは衝突する結果となった。怒った兵士たちは夫人に詰め寄り、護衛兵2人から銃を取り上げた。驚いた陳夫人は逃げ出し、事務室に助けを求めた。互済総会（党の救援組織）から病院に派遣されていた張瓊が兵士たちをなだめ、その場は一応おさまりがついた⁽⁶⁾。

7) やはり、上海事変の折り、極左路線を歩む党中央は、兵士工作を推進し、革命兵士委員会を成立させようとした。彼らは日本軍と闘っている十九路軍の兵士たちに、銃口を自分たちの上官（即ち蔣光鼎、蔡廷鍔）に向けよと煽動していた。この指示は実際には貫徹されなかった。工作に当たっていた学生たちは、それを宣伝することは躊躇したし、兵士たちも受け入れなかった。

3月1日、日本軍の攻撃を受けた十九路軍は、止むなく第二防衛線にまで退くことを決定する。3月2日、日本軍がまだ閘北に進出してこない間隙をつき、中共は傘下の上海民衆反日救国聯合会（民反）を動員し、武装暴動により、労農ソビエト政権の樹立を企てた。だが、当日集まったのはわずか2、3百名の大衆であった。集会が開かれるやいなや国民党閘北保衛団が押し寄せ、指導者が銃殺され、あっさり鎮圧されて終わった。まさに未熟な革命ごっこであった⁽⁷⁾。

〔注〕

- (1) 齊速「我和上海左聯的一段關係」、『左聯回憶錄』下。
- (2) 黃靜文「三十年代初互済総会的一些情況」、『党史資料』第4輯。
- (3) 林立「王明“左”傾路線對上海地下闘争的危害」、『党史資料』第3輯。
- (4) 胡允恭「山東工作回憶」、『金陵叢談』，人民出版社，1985年。
- (5) 張維楨「一九三六年上海的紗廠工人運動」、『党史資料』第5輯。
- (6) 張瓊「劉少奇同志在上海革命活動片断」，

『党史資料』第3輯。

(7) 韓進「回憶上海民衆反日救国義勇軍的活動」，
『党史資料』第9輯。

長征期における白区（国民党支配地区） 党の挫折と再生

白区の共産党は、当時上海中央局、北方局に統括されていた。それ以前には、一定の地域を統括する白区の党上部組織として、そのほか南方局及び満洲省委員会（東北局）があった。が、南方局（兩広省委）は1932年頃に国民党の摘発を受け瓦解した⁽¹⁾。また満洲省委は東北が日本軍の統治下にあり、且つ活動の中心を東北農村のゲリラ活動に移しており、上海や天津の党組織との連絡が困難を極めたことから、主にソ連側から中共駐コミンテルン代表部（代表王明）の指導を受けていた。当時は上海局及び北方局の党の指導系統からは離れていた⁽²⁾。

上海中央局（中共上海「中央執行局」）は、上海にあった中共中央が1933年初頭、国民党の苛烈な弾圧に抗しきれず、ソビエト区入りした後、白区の党組織と地下運動を指導するため設けられた機関であった。33年以降、引き続き極左路線を継続し、弱体化した党組織に見合わぬ方針を下部に押し付け、さらに党組織の脆弱化を招きつつあった。

博古（秦邦憲）、洛甫（張聞天）のソビエト区入りに伴い設けられた上海中央局の書記になったのは、李竹声であった。34年6月の李の逮捕後、代わって書記になったのは、盛忠亮であり、その盛も9月には逮捕されている。李、盛ともにソ連留学組であり、所謂「二十八人のポリシェビキ」の一人であった⁽³⁾。そして、ともに国民党に逮捕された後、取り調べに耐え切れず党を裏切り、党の機密を敵に売ったばかりか、その後逮捕された党員に向かい、党にはもう前途がない、党を裏

切れと勧め、国民党の共産党壊滅作戦に大いに手を貸している。

李、盛ばかりではなく、当時上海党の中枢にいたソ連留学組や彼らに抜擢された労働者出身の幹部たちの多くが、逮捕されたあと、幾ばくもなく転向し、いとも簡単に昨日までの仲間を敵に売ったのである⁽⁴⁾。上海中央局は、二度にわたる一斉検挙の後、さらに35年2月、三度目の大検挙に遭う。この時、書記黄文傑のほか、中央局指導部に参加していた左聯や社聯のリーダーであった田漢、陽翰笙、朱鏡我などが逮捕にあったが、かれらは李、盛らとは異なり、敵の取り調べに耐え、その結果長い獄中生活を迎える。

だが、当時は敵の方が一枚上手であった。一斉検挙に当たって彼らは、共産党容疑者の全員を捕縛はせず、必ず何名かを残しておいた。逮捕を免れた党員が、ほとぼりが冷めたと判断し、有力党員に連絡をとり現れるのを網を張って待ち、残されたメンバーにより党指導部が再建され、党活動が始められる頃、広がった網をまた手繰り寄せ、党指導部を一網打尽にするという作戦をとっていた。これに対して上海での地下運動が危機的な段階に入ると判断した中央局は、組織の天津（北方局）、武漢などへの分散を決定、敵の最後の攻勢を避けようとしていた。だが、すでに時期を逸していた。7月、三度再建された中央局指導部は国民党の手入れを受ける。四度目の一斉検挙の後、中央局にはもう立ち上がる力が残っていなかった。

中央局が崩壊した後、残された上部組織は北方局だけであった。だが、当時の北方局は名ばかりの組織であった。北方局は当時河北省委管轄の組織以外に、陝北及び内蒙古特委との間に連絡があったが、後者の活動は微々たるものであった。陝北には郭洪濤（1933年派遣）、朱理治及び聶洪鈞（35年派遣）などを派遣し、謝子長、劉志丹をリーダーとする陝北の党と紅軍を、彼らの路線（王明路線）に従わせようと骨を折っていた。だが、陝

北土着の共産主義者にとって、上部組織の権威をかさに状勢にそぐわぬ無理な要求をつきつける郭、朱らは迷惑でやっかいな存在であった。朱、聶、郭らはついに35年10月、陝北に到着したばかりの紅二十五軍の助けをえて、劉志丹、高崗など陝北の共産主義者の肅清に乗り出す。

そのほかの山西、陝西、河南などの省級組織は、いずれも30年代前半に国民党の弾圧によって壊滅しており、33年の省委壊滅の後に独力で再建の歩みを始めた山東の党は、まだ彼らの視界にとどいていなかった。

北方局が辛うじて維持していたのは、膝下の河北省委だけであった。35年5月、北方局書記（中共中央駐北方代表）であった孔原が上海を経てソ連に向かった折り、その後の組織維持をどのようにするかが問題になった。孔原が提案した、高文華を書記とする河北省委が、省外の党組織に対しては北方局の名義で、省内に対しては河北省委として指導する案が、この時決められた。一つの指導部が二つの看板を掲げていたのである⁽⁵⁾。

35年当時、河北省委は約1千名以上の党員を擁していたといわれている⁽⁶⁾が、その実、当時河北の革命運動を支えていたのは、農村組織であった。河北の二つの大都市、北平（北京）と天津は、いずれも33年以来の何度かの一斉検挙により、活動不能に陥っていた。北平の党組織は33年5月上旬、河北省委及び北平市委の両機関が摘発を受け、大きな打撃を被った。同年夏の察哈爾抗日同盟軍の決起以後、さらに弾圧を強化した国民党の攻撃の前に、同7月には省軍委及び党の外郭組織の多くが一斉に摘発され、再び大きな損失を出した。組織維持さえおぼつかなくなった河北省委は機関を天津に移す。だが、憲兵第三団を送り込み、徹底して地下組織の息の根を止めんとする国民党は、34年8月またもや北平市委を摘発。そのダメージは大きく、以後しばらく北平の党は態勢を立て直すことができなかった。1934年には天津市委も一斉

検挙により瓦解、天津市委はその名を残すのみで、個々の党員が細々と活動を継続するのみとなった。河北省委の足腰を弱めたのは、以上のような国民党の徹底した弾圧攻勢だけではなかった。33年末から34年始めにかけて、当時河北省委の幹部であった李鉄夫（朝鮮人）は、党がそれまでとってきた極左路線の在り方を批判する文章及び意見書を書いた。それは、省委機関誌『火線』などに相次いで発表され様々な波紋を投げかける。李鉄夫は、従来の極左路線がとってきた、北方党の組織力量を無視した戦略・戦術（例えばゼネスト、飛行集会、武装暴動）の押し付けや、大衆運動の軽視、教条主義的・命令主義的指導、大衆団体の赤色組織化に見られる閉鎖的傾向などを批判し、それらを改めるように主張したが、当然にも北方局からの厳しい反批判を招いた。34年2月から6月にかけて、河北省委内では、反中央であり、右翼日和見主義の見本である「李鉄夫路線」に反対する闘争が激しく展開され、李鉄夫は党から追放される。そればかりではなく、彼に同情的であった省委メンバーや反李鉄夫闘争に消極的であった党員たちが、右翼日和見主義、「調和主義」、李鉄夫路線の支持者として北方局の容赦のない批判に晒されている⁽⁷⁾。この反李鉄夫路線闘争は一年以上も続いたといわれているが、党の現状を踏まえ、どのように自らの誤りをただし、闘っていかねばならないかを、正直に述べた李鉄夫の追放は、弾圧にもめげず地下運動に従事していた党員の士気に大きな影響を与えずにはいかなかったと思われる。

35年6月、中央代表であった孔原が去った後、北方局は党中央との連絡を失った。指導力の低下に加えて、財政問題が大きく指導部にのしかかってきた。指導部の生活費はおろかちょっとした活動費にも事欠く状態に陥っている。35年8月には、モスクワにおけるコミンテルン第7回大会において、反ファッショ統一戦線の構築が決定され、10

月には「八・一宣言」が公表されたが、その宣言が新たに提唱した抗日民族統一戦線の呼び掛けにも、高文華を中心とする北方局＝河北省委指導部は、どのように対応してよいか皆目見当がつかなかったというのが、真相であろう。彼らとしては、数年来の党活動で身に染み込んだ戦略・戦術で局面の打開にあたるはかなかった。35年夏以後の冀南暴動はその典型であった。折からの農村経済の破産状態にあえぐ農民を率いて起こした武装蜂起は、大した準備もなく決行されたため、また根拠地とすべき自然条件もなかったため、地方軍数個師の投入と保安隊、民団など地方の反動武装部隊の攻勢によって簡単に鎮圧されてしまっている。

さらに、35年11月、日本軍の傀儡、冀東防共自治政府が成立し、国民政府からの離脱が宣言された河北東部においては、李運昌を中心とした冀東特委が密かに抗日武装闘争を準備しつつあった。

〔注〕

- (1) 何錦洲「陸更夫」、『南粵英烈伝』第二輯，広東人民出版社，1986年。
- (2) 金字鐘「趙尚志」、『中共党史人物伝』第10巻。
- (3) 陳修良「莫斯科中山大学里的闘争」、『革命回憶録』増刊1輯。
- (4) 沈憶琴，薛森榮，宋祖彰「關於一九三三年建立的上海中央局的一些情況」、『党史資料』第6輯。
- (5) 高文華「關於一九三五年前後北方局的若干歷史情況」、『党史研究資料』第3輯，四川人民出版社。
- (6) 同上。
- (7) 董建中，張守憲，金亨值「李鉄夫」、『中共党史人物伝』第30巻。史略「李鉄夫対王明“左”傾冒險主義的抵制和所謂反“鉄夫路線”的情況」、『党史研究』1983年第6期。

第一章 北京

北平（北京は1928年、南京国民政府の成立とともに北平と改められている。中共の組織も当時は北平市委員会と称していた）の党組織は31年9月の「満洲事変」勃発時の反日運動の盛り上がり、国民党当局によって封じ込められた後、ほとんとなりをひそめていた。33年4月23日、李大釗の改葬⁽¹⁾が北平の西の郊外で行われ、葬儀にともない学生を中心としたデモが決行され、久しぶりに党の力をアピールする機会となった（参加者約8百人）。だが、それは同時に中央憲兵第三団（蔣介石の甥とされる蔣孝先が首領）を迎え弾圧の体制を強化していた国民党の軍警に逮捕の機会を提供することになった。このデモだけでも40数人の学生が逮捕され⁽²⁾、さらにそれは5月の北平の党組織に対する一斉手入れにつながる。続いて夏には馮玉祥の察哈爾抗日同盟軍が決起、北平から学生を中心として3百名近い党員が現地赶赴き支援活動にあたった。この事件も国民党当局の注意を呼び起こすには十分であった。抗日同盟軍の挫折とともに、北平に戻ってきた学生たちを待ちかまえていたのは、やはり逮捕の嵐であった。7月以後、北平の党の外郭機関は軒並み検挙されるダメージに襲われる。この年、李大釗改葬以後逮捕殺害された学生・青年は5百名以上にものぼったといわれている⁽³⁾。

1934年8月、北平市委員会がまたもや摘発を受け、後に残された党員は幾ばくもなかった。当時、連絡がとれた党員はわずかに10名足らずであり、党員はいれども組織はない状態であったといわれている⁽⁴⁾。組織が活動を開始したのは漸く35年に入ってからのものであった。革命運動はおろか、組織維持さえおぼつかない状況にたたされたのである。35年初めになってようやく河北省委と連絡がつき、事態を憂慮した河北省委は、同年の春

(夏)、省委特派員李常青を北平に派遣した。李は、当時の共青团北京市委員会指導部により党指導部を一時兼務させることを指示、中共臨時北平工作委員会を設立した。書記は王学明（東北中山中学）、メンバーは彭濤（輔仁大学）、楊子英などであった⁽⁵⁾。そのほか、外郭組織である進歩的な大衆団体については、周小舟が中華民族武装自衛会（武自会）の、谷景生が社聯、左聯など文化団体の指導にあたった。

この北平臨時工作委員会の設立が、皮肉にも北平の革命運動を再生させる切っ掛けをつくった。書記に据えられた王学明はまだ高級中学生であった。勿論革命運動の経験も浅かった。彭濤は当時22歳（1912年生まれ）、33年の察哈爾抗日同盟軍の抗日活動に参加した経験をもっていた（王学明もおそらく参加していたと思われる）。彭濤、周小舟、楊子英らは、厳しい状況のなかで、運動の再建のためにそれぞれの組織活動を地道に続けていた。彼らは、いつも左翼的言辞を振り回し、計画性がなく、ただ外回りに精を出す王学明にはいささかうんざりしていたようである⁽⁶⁾。

35年に入り、日本軍はいよいよ華北支配の意図を露骨にし始めた。5月、天津租界における親日派新聞人の暗殺に端を発した華北事件は、ついに「何応欽——梅津秘密協定」の締結に発展した。国民政府からの離脱を叫ぶ華北自治運動なるものが、日本軍に唆され発生、河北、察哈爾両省を中心として、華北は騒然とした雰囲気包まれていく。

35年夏、黄河水害による難民の救済運動が彼らの運動の出発点となった。大衆団体であった武自会の発起により、合法団体「黄河水災賑済会」（水害被災者救援会）を設立し、各校の有志に参加を呼び掛け、募金、慰問活動を行ったのである。この救援活動の盛り上がりにつれ、各校に救援会ができ、それがその後の彼らの抗日運動の足場になったのである。

彼らに味方したのは、同時期、北平、天津両都市から、国民党党部、軍、憲兵第三団、藍衣社などが日本軍の圧力により撤退を余儀なくされたことであった（何梅協定）。これにより救援活動のような合法団体の公開活動は、以前のような徹底した取り締まりの対象とされることがなくなったのである。さらに、彼らを勇気づけることが続く。「八・一宣言」の発表である。従来の「中間勢力主要打撃論」や「左翼ファシズム論」が、ヨーロッパにおいては結局全体主義の勝利と共産党の孤立に結びついたことを反省したコミンテルンは、1935年7、8月、第7回コミンテルン大会において、路線を大きく旋回させ、反ファシズム統一戦線（人民戦線）を提唱するにいたった。続いて、当時モスクワにいた王明らは、国民党を含むあらゆる抗日勢力に民族統一戦線の結成を呼び掛ける「八・一宣言」（「抗日救国のために全ての同胞に告げる書」）を発表する。

「八・一宣言」がどの時間に、どのような経路で中国に届いたかについては各説がある。最も遅い時期でも、35年冬（北方では一二・九前後）には間違いなく中国の左翼の耳に入っていたと言われる⁽⁷⁾。実は、「八・一宣言」が公表されたのは、8月1日ではなく10月1日、パリで発行されていた抗日誌『救国報』（その後、『救国時報』と改称）紙上においてであった。

ところが、35年8月中、徐冰、楊秀峰など北平、天津の各大学の進歩的教授が密かに北京郊外の玉泉山に集まり、「八・一宣言」に呼応して如何に大衆に呼び掛けるかを話しあったと伝えられている。その時、彼らを訪れた俞啓威（すなわち黄敬）もこの討議に加わっていたと言われている⁽⁸⁾。回想者たちは「八・一宣言」とコミンテルンの方向転換を宣言したディミトロフ報告を取り違えている。実は、徐、楊ともに秘密共産党員であり、北方特科と呼ばれる組織系統に属していた。内外の情報に通じていた彼ら特科系統の党員たちは、

それ以前からコミンテルンの論調の変化を読み取り、反ファシズム統一戦線の中国への適用を密かに検討していたのだと思われる。

秋から冬にかけて、北平臨委内部の確執はいよいよ明確になってきた。衝突は当初は人事（メンバーの移動をめぐる）問題で始まったが、次第に抗日民族統一戦線結成の可否をめぐる本質的な問題へと進んだ。もし、従来どおりの極左路線を踏襲し、国民党政府の打倒とソビエトの樹立を目指すならば、抗日への決起を大衆に呼び掛けるため、国民党政府に言論、結社、集会の自由を要求するのはナンセンスであった。王学明たちにとり、それらは社会民主主義的なスローガンでしかなかった。ましてや、たとえ抗日派であっても国民党と共同して抗日闘争を推し進めるなどというのは、右翼日和見主義であった。だが、彭濤、周小舟たちは、すでに抗日問題についての時局討論会や文学、エスペラントなどのサークル活動などを通じて学生大衆と結びつきを深め、黄河水害被災者救援活動の盛り上がりによる運動の再建に自信を深めていた。しかもコミンテルンの反ファシズム統一戦線の提唱及び「八・一宣言」の発表に勇気づけられ、民族解放を目指し、抗日のために国共の内戦を停止すること、すべての抗日勢力の力を合わせて日本軍の侵略から東北を奪い返すための闘いを開始すること、そしてそのために抗日民族統一戦線を結成するよう、国民党政府に要求していくことを主張した。そのなかからしか、革命運動の突破口は生まれないことを理解し始めていたのである。

11月25日、日本の傀儡、尹汝耕を主班とする冀東防共自治委員会（後に政府と改称）が発足、南京政府からの離脱を宣言した。続く12月には、河北、察哈爾（チャハル）両省を南京政府の行政系統から切り離すべく冀察政務委員会が発足の運びとなっていた。事態はいよいよ急を告げ、一刻の猶予もならぬ時期となった。11月、北平の各大学、

中学校の代表により、北平大中学校抗日救国学生連合会が発足した。彼らは、この民族危機を捉え、冀察政務委員会の発足を阻止し、全国に抗日への決起を訴えるための抗議行動を計画する。時期はすでに熟していた。行動日は冀察政務委員会が発足すると伝えられた、12月9日に決められた。

北平臨時工委内の抗争は最終局面を迎えていた。王学明らはこのような合法的な大衆闘争の意義を認めなかった。彼らは何とかこの大衆行動を止めさせようと画策した。王学明たちと彭濤たちは、各々代表を天津の河北省委に派遣し、経過を説明、省委の支持を求めた。12月9日の前々日、省委は李常青を北京に派遣、李は王、彭両方から意見を聞いた。だが、彼は結論を出さず、どちらを支持するとも言わなかった。ただ、9日の行動日を目前にして、その行動に反対はせず、同意を与えている⁽⁹⁾。李常青ばかりでなく、高文華たち河北省委（北方局）も、この両者の紛糾をどのように処理してよいか判断できなかったであろう。従来のように、組織への絶対的服従をかさに彭濤たちを押えてみても、組織機構がすでにズタズタにされていた当時では、大衆をつかんでいる彭濤たちを排除することは、革命運動そのものの自滅であった。だが、「八・一宣言」に力を得、大胆にっ走ろうとしている彭濤たちの闘いのスタイルが果たして正しいのか、コミンテルンや党中央がそれを正しいと認めるものであるかどうか、上部組織との連絡が不可能な当時では、確かめようもなかった。つまり、成り行きに任せるしかなかったのである。

12月9日、朝まだ明けぬうちから始まった抗日のための抗議行動は、大成功を収めた。当初、8百人あるいは1千人と予想した参加者は、その数を軽く突破、2千とも3千にものぼると言われた。抗議行動の参加者は、一旦新華門の前に結集、何応欽（国民党軍事委員会北方分会代理委員長）に面会をもとめ、請願を行おうとした。だが、何応

欽は現れず、集まった北京各校の学生たちは、6項目の請願要求⁽¹⁰⁾を裁決し、続いてデモンストレーションに移った。「満洲」事変勃発時の一連のデモの後、久しく試みられなかったほど大きなデモンストレーションであった。デモは城内の各校を巻き込み、かつ軍警の弾圧のなか激しく繰り広げられた。12月の冬空のもと、軍警の放水に水びたしになり、棍棒の雨に打たれながらデモは果敢に続けられた。

「一二・九」の大デモンストレーションの様子は国民党の言論封鎖の網をかいくぐり、全国に報じられ、中国に興奮の渦を巻き起こした。長い間、日本軍の継続的な侵略に鬱屈した気持ちを抱いていた中国人の、眠りを覚ましたのである。それは爆発的反応であった。

北平では、彭濤など「一二・九」運動を指導した革命家、活動家が、興奮覚めやらぬまま、参加各校から入る連絡を受けながらデモの反応を分析していた。結果は予想以上のものであった。デモに参加したものからも、参加しなかったものからも、再度の抗日デモをという要求が次々に伝えられたのである。彭濤と運動指導部に参加した黄敬は「大衆がもう一度というなら、もう一度やろう」と言葉を交わしていた⁽¹¹⁾。

もう北平臨時工委の間の主導権争いなど問題ではなかった。それは、彭濤たちにとっても、王学明たちにとっても、李常青、高文華たち河北省委にとっても同様であった。事態はすでに小さな党組織に関わるレベルを越えていた。局面が大きく変わり始めた以上、運動の開始前の組織形式にはもう戻れなかった。「一二・九」に参加した各校のリーダーたち、これが新しい北平党の指導部であった。彭濤、姚依林（清華大学）、郭明秋（女子一中）といった従来の北平学聯の党フラクションのメンバーに加えて、黄敬（北京大学）、宋黎（東北大学）、董毓華（中国大学）といった比較的年長の、すでに革命運動の経験のあるメンバー

が指導グループに参加、指導グループに厚みを加えた。そして、その流れは「一二・一六」においていっそう拡大する。各校の学生救国会のなかから、新しい世代のリーダーたちが大量に生まれ、前線に踊りでるに及んで、指導陣の面では、運動の様相は数ヶ月前とは一変するにいたる。

12月16日、冀察政務委員会の成立が予定された日、北平で再び大きなデモンストレーションが決行された。今回は前回にまして参加者が多く、その数は1万以上と言われている。軍警の厳しい警戒のなか、各校の活動家たちは動員に全力をあげ、警官隊の阻止線を突破して学外に飛び出し、天橋の広場を埋めつくした。学生のほか、抗日を望む北平の民衆が会場につめかけ、学生たちを鼓舞した。「一二・一六」は、「一二・九」が単なる一回切りの線香花火のような抗議行動ではなく、大衆に支えられた持続的な抗日運動であること、不退転の闘いであることを人々に向かって宣言したのである。

「一二・九」と「一二・一六」のインパクトは強烈であった。その後一ヵ月にわたり、全国の各都市では学生及びインテリゲンチアを中心とした抗日デモが巻き起こった。このインパクトによって起こった抗日運動の全体を「一二・九運動」と呼ぶが、それは挫折に終わった大革命（国民革命）期以来の革命運動の昂揚を中国にもたらしたのである。西安事変の勃発も、第二次国共合作の成立もこの運動抜きにはまず不可能であった。

「一二・九」、「一二・一六」以後の抗日運動の盛り上がりに対して、国民党中央政府は、冬休みを繰り上げ、運動の鎮静化をはかる。それに対して運動指導部は思い切った手で答える。救国の主張を農村に推し広めることを目指した「南下宣伝隊」の結成である。これはある意味では、ロシアのナロードニキの「ヴ・ナロード」（民衆のなかへ）と同じく理念がかった行動の提起のように見える。確かにそのような志向は気分的なもの

して、多分にあったであろう。また、彼らのなかに残っていた、極左路線の名残も影響していた。回想では、黄敬は、この「南下宣伝隊」をさらに南進させ、当時河北省南部で起こっていた農民暴動（冀南暴動）と結びつかせ、遊撃隊を組織することも考えていたという。まだ残っている従来の路線の支持者の主張に対抗する必要もあり、武装闘争もやらなければという思いが勝った、この思いつきは思いつきのままで終わった⁽¹²⁾。

黄敬、彭濤など指導部の真の狙いは、この冬休みの集団行動によって運動に参加してまもない活動家たちを鍛え、運動（彼らの党）の中核に育てることであった。大体が富裕の家に生まれた学生たちが、春節（旧正月）に家にも戻らず、新しく闘いに参加した仲間たちとともに、冬の冀中平原を南下し、農民に救国の道理を宣伝しようというのである。そのなかで、家族のつながりや日頃の学生仲間の付き合いと一旦縁を切り、農村を歩きながら不自由な暮らしをともに過ごすことで、別のレベルの生活に彼らを誘い込もうとしたのである。そして、この試みも成功する。彼らは春節を前にした農村で、彼らの抗日の訴えを聞くゆとりも持てないほど貧しい暮らしをしている農民に会う。警察、保安隊に追われながら彼ら相互の連帯は深まる。軍警によって解散される前、彼らは永遠の団結を結ぶべく、「民族解放先鋒隊」をつくる。これが、その後国民党支配地区で学生、青年労働者の間に野火のようにひろまり、抗日運動を下から支えることになる。

36年2月から3月にかけて、運動に転機が訪れる。一つは2月下旬に始まった国民党軍警の徹底した弾圧の到来である。相次いで活動家、指導者が逮捕され、運動は一時停滞する。だが、新たに参加した活動家が多かった割には、組織は健全であり、運動は強固であった。また、抗日への流れはすでに世論となっていた。学生に対する支持や同情は侮れないものがあり、国民党の抗日運動に対

する弾圧はそのままでは限度があった。2月下旬の平津学聯に対する一斉検挙と、次の「三・三一事件」により、運動は少なからぬ損失を被ったとはいえ、それは一時的なものであり、致命的なものにはならなかった。

もう一つ、危機は、自らの「先鋒主義」の自然成長により、運動に抑制が利かなくなったことからやってきた。その現れが悪名高い「三・三一」事件となって噴出する。先の弾圧より逮捕された中学生の一人、河北高中の郭清が苛酷な取り調べの末、獄中で死亡したのである。抑え切れない怒りが広がり、3月31日、北京大学第三院において追悼集会が挙行された。弾圧で、多くのリーダーや活動家を失ったため、各校とも十分に連絡がとれず、準備不足のまま約1千人ほどが集まっただけであった。集まった活動家大衆は、激昂のあまり、用意していた棺桶を担いで街頭にくりだし、待ちかまえていた軍警と衝突、逮捕者53名を出した。そのなかには、学聯のリーダー黄華（燕京大学）、北京大学のリーダー謝雲輝らも含まれていた。運動にとっては確かに手痛い打撃であった。

このような運動の転機は、或る意味では指導の危機でもあった。運動の停滞曲面でどのように組織と運動の維持をはかっていくのか、メンバーの焦りをどのように鎮めるのか、危機に臨んで敢えて過激な戦術に出たがる者をどのように説得するのかといった問題に対して、当時北京に残っていた学聯のリーダーたち（黄敬、黄華、郭明秋など）は、対応しきれなかった。すでに周小舟は前年のうちに北平市委から所属を北方局連絡部に移しており、学生たちを指導する立場にはいなかった。また彭濤も2月に北方局（天津）に転出していた。また董毓華は、劉江陵（北京大学）とともに全国の抗日学生運動を盛り上げるため、すでに上海に向かっていた。学聯党フラクションのメンバーであった王其梅（民国大学）は2月に逮捕されており、姚依林は逮捕を逃れ、潜伏し天津へ向かって

いた。このように指導グループの弱体化が、急速に膨らんでいく運動と、そのなかで生まれる急進的な感情を制御しえなくなっていた。そのような急進化は放っておけば、活動家部分と大衆を切り離してしまう可能性をもっていた。

1936年春、党中央に派遣され陝北から劉少奇が天津に着き、北方局書記に就任した。北方局を兼ねていた河北省委はその兼務を解く。劉少奇は早速、この北京における「三・三一」事件を取り上げ、従来の極左的な「閉鎖主義と冒険主義」の現れと批判し、運動の抗日大衆からの遊離の危険性を指摘した⁽¹³⁾。

だが、これは後に、事件の参加者が回想しているように、従来の極左路線とはほとんど関係のないことであった。むしろ、若者の急進的な運動にありがちな、運動の自然成長性といったものにより、運動が過熱し、上すべりし始めたことの現れであった。別に極左主義者でなくても、閉鎖的な集団でなくても、このような行動は、その経験のなさにより起こる可能性がつねにある。劉少奇のこの批判は、組織的には北平の学生党員の上部組織にあたる河北省委（すなわち旧北方局）が農村部ではいまだに暴動路線をとっており、従来の極左路線を脱していないことと、学生運動の暴発とを、同じ要因によるものと見なしたところからきている。しかし、逼塞していた革命運動に風あなを開けたはずの、一二・九運動の指導者たちが、この批判のおかげで、極左路線の実践者として、その後ずっとレッテルを貼られることになったのである⁽¹⁴⁾。勿論、劉少奇自身、数十年後、この彼の批判がどのような禍（わざわい）をもたらすかなどといったことを予想できたわけではないが。

劉少奇は北平市委を改組し、「一二・九」以後、王学明の後を受け北平市委書記となっていた林枫を北方局秘書に転出させ、代わりに李葆華を市委書記にすえた。李葆華は李大釗の長子であり、河北省委においては従来からの幹部に属していた。

彼ら指導部は、学聯のリーダーたちにもう暴走は許さないことを決めていたらしく、学聯と市委の間には軋轢が存在していた。

学聯は2、3月に手痛い打撃を受けた後、組織と運動の足腰を鍛えるため、柔軟路線を採用、大衆との結びつきを再び強化し始める。ほどなく、世論や大学人、文化人などの同情や支援もあり、ほとんどの逮捕者が釈放される。各校では、学生会（自治会）を学生救国会と改称し、北平学聯も北平市学生救国聯合会に改めている。

5月28日、天津において抗日デモが挙行された。それに呼応しようとした北平では、6月13日になってようやく抗日デモを決行する。失敗を恐れた北平市委が躊躇したため、時期を失ってしまったのだと言われている。劉少奇は、「極左的な誤りを犯した後は、臆病風に吹かれて手足が縮んでしまったのか。これまでは北京が先頭を切っていたが、今度は北京が遅れてしまった」と北平市委を批判する⁽¹⁵⁾。他に対照する資料もないので、この批判が適切なものであったのかどうか確かめるすべがない。ただ言えるのは、もし「三・三一」に対して、極左云々の批判をしていなければ、この批判は適切なものであった。だが、新任の北方局の最高指導者が学生運動を極左と批判した以上、批判をおそれた新指導部が、学生たちの行動を抑制し、先走らせないようにするのは、当時の幹部の在り方からいってむしろ当然の反応であった。

学生たちの先鋒主義とそれを扱いかねている北平市委のギクシャクした関係はその後も続いたようである。「六・一三」デモの後、日本軍の圧力により冀察政務委員会は、北平学聯の解散を命じ、それに対抗した学聯はストライキに突入した。同時に、6、7月の試験時期特有の期末試験反対闘争が加わり、北平の各校のストライキはなかなか収拾がつかず、北平の各校では多くの退学者（2百名以上といわれる）を出す結果となった。このようなストライキは当局の夏休みの繰りあげ実施

を誘うだけの、ほとんど意味のない、そしてまた世論の支持も望めない闘争スタイルであった。そのことに気づいた学聯は途中から戦術を変更、ストライキの解除を指令するとともに、除籍にあった学生の救済に力を注ぎ、世論の一定の支持を得ることに成功する⁽¹⁷⁾。(除籍にあった学生たちの多くは、西安や太原に赴き、軍隊に入って、抗日宣伝に当たったと言われている)。このような運動における方針の揺れは、学聯指導部と市委の軋轢を反映していよう。

北平における暴走しかねない学生運動と、それを指導しきれない市委の間の矛盾に手を焼いた北方局は、市委の再改組にでる。新しい葡萄酒は新しい革袋に入れるというわけである。市委の組織部長に黄敬を送りこみ、学聯と民先(民族解放先鋒隊)の指導を委ねたのである。それまで、各学校支部はそれぞれ区委員会(地区の党組織)に所属し、別々に指導を受けていた。北平全体の学生運動の指導は、北平学聯指導部が行なっていたが、学生党员は個々別々の指導系統に所属し、その指導に服さなければならなかった。

36年10月、党中央の指示により、北平の党员を統一して指導するために、中共北平学生運動委員会(学委)を設置、書記には蔣南翔(清華大学)が就任する⁽¹⁸⁾。学委は北平市委のほか、北方局の指導も直接受けることになった。北平の学生運動はここに独自の指導機関をもつことになった。続いて北平市委書記に黄敬が抜擢され、「一二・九」運動指導部の躍進ぶりを示すことになった。

この時期の学生運動のもう一つの重要な変化は、民先隊が公開組織化し始めたことである。民先隊は、従来の赤色大衆組織よりも開放的であったが、それでも当初は、集団生活が自由に行われていたのは小組の段階だけであり、小組相互の段階では従来通り横の関係が禁止されていた。公開活動は学生会、北平学聯や、コーラス隊、抗日劇団、文芸団体が任っていた。その後、36年4月28日には

燕京大学と清華大学の民先隊員80名が軍事訓練を行なったが、それが横の繋がり端緒であった。以後、次第に横の関係が広がり、夏休みには、民先隊は二度のキャンプを行なった。最初のキャンプには160余名が参加し、二回目は220余名が参加した。軍事訓練や野営活動が活発になればなるほど、組織間の横の関係を絶つことは不可能になった。また、統一戦線樹立に見合った組織づくりを目指し、より多くの抗日青年の参加を促すためにも、秘密組織めいた部分はできるだけ除く必要がでてきた。10月の民先隊拡大幹部会議において、ついに横の関係がはっきりと認められるようになった。縦の関係をできるだけ簡略化し、隊員相互や指導者どうしの直接連絡を取り合い、隊員の創造性や独立作戦の能力を高めるように、組織原則が改められたのである⁽¹⁹⁾。12月12日、奇しくも西安事変⁽²⁰⁾の当日、二十九軍兵士の抗日の側への獲得を目指し、再び北平においてデモンストレーションが行なわれたが、その統制のとれた組織ぶりは、学委と民先隊の新しい指導体制が固まってきたことを示している。

〔注〕

- (1) 李大釗は1927年4月7日、奉天軍閥張作霖に逮捕され、同月28日処刑された。当時、十分な葬儀を行なうことができなかったため、改めて安葬することになり、宣武門外の寺に葬られていた遺体を、郊外の香山の万安公墓に移した。字斧「李大釗烈士殯葬紀実」、『革命回憶録』第13輯。
- (2) 王志之「憶“北方左聯”」、『左聯回憶録』下、中国社会科学出版社、1982年、592頁。陳北鷗「回憶中国左翼作家聯盟北平分盟的艱苦闘争」、『左聯回憶録』下、549頁。
- (3) 『清華大学校史稿』、中華書局、1981年、255頁。『北京大学学生運動史』、北京出版社、1979年、112頁。
- (4) 彭濤「關於“一二九”運動的回憶」、『一二九運動』、中共党史資料出版社、1987年、313頁。

- (5) 姚依林「“一二九”運動回憶」，『一二九運動』，321頁。
- (6) 周小舟「我与“一二九”」，『一二九運動』319頁。
- (7) 周小舟前掲文，319頁。向青「『八・一宣言』形成的歴史過程」，『党史資料』，第12輯。
- (8) 許德衍「“一二九”的断片回憶」，『一二九運動回憶錄』第一集，人民出版社，1982年，216頁。
- (9) 周小舟前掲文，320頁。姚依林前掲文，325頁。
- (10) 六項目の要求のなかに、「停止内戦，一致对外」があったかどうかについては諸説がある。高錦明「一二九時期在北師大的片断回憶」，『一二・九運動与北平師大』，北京師範大学出版社，1985年，36頁。
- (11) 郭明秋「回憶“一二九”運動的党的領導」，『一二九運動回憶錄』第一集，63頁。
- (12) 王林「“一二・九”運動中黃敬同志二三事」，『文史資料選編』第26輯，北京出版社，43頁。だが，宋黎の回想によれば，12月末の北平党の會議に上部組織が人を派遣し，その人物が抗日武装勢力との結合を指示，會議は南下宣傳団の組織とともに，大名一帯での武装抗日遊撃隊結成の準備を決定したと述べている。つまり，黄敬の武装闘争云々という発言は，彼の本心から出た発言なのかどうか，熟慮のうえの発言なのかどうかは疑問である。上部の人物の手前，止むを得ず語った発言だと考えた方が妥当である。
- (13) 劉少奇「論北平学生紀念郭清烈士的行動」，「肅清閥門主義与冒險主義」，『一二九運動資料』第2輯。
- (14) 韓天石，黄華等「回憶“一二九”運動」（座談会），『一二九運動回区錄』第一集。
- (15) 李雪峰「一九三六年一月至一九三七年一月中共北平党組織及其活動情況」，『一二九運動』。李葆華「一九三六年四月至十二月中共北平市委的組織簡況」，『一二九運動』。李雪峰は36年1月

末か2月初めに，北平市委書記に任命され，4，5月の市委の改組により組織部長に転じたと回想している。北平市委指導部は「一二・九」前から頻繁にすげかえられており，とても北平学聯を指導できる体制になかったことがわからう。

- (16) 李雪峰前掲文，345頁。『一二・九運動史要』162-3頁。
- (17) 武尚仁「“一二・九”運動中的北平師大」，『文史資料選編』第26輯，137-8頁。
- (18) 「中共中央書記処給北方局及河北省委的指示信」（一九三六年八月五日），『一二九運動』。『一二・九運動史要』169頁。
- (19) 「我們的隊伍」，『一二九運動資料』第二輯，376頁。
- (20) 「蔣南翔同志談一二九運動」，廖蓋隆編『中共党史文摘年刊（1984）』，中共党史資料出版社，1987年。このなかで蔣南翔は，西安事變のおり，黄敬が囚われた蔣介石の処刑を強く主張したと述べている。

参考文献

- (1) 『一二・九運動史要』，中共中央党校出版社，1986年。
- (2) 『一二九運動』，中共党史資料出版社，1987年。
- (3) 『在抗日救亡運動的洪流中』，北京出版社，1988年。
- (4) 趙栄声，周游編『一二九在未名湖畔』，北京出版社，1985年。
- (5) 『戦闘在“一二・九”運動的前列』，清華大学出版社，1985年。
- (6) 『一二・九運動与北平師大』，北京師範大学出版社，1985年。
- (7) 『周小舟伝』，湖南人民出版社，1985年。
- (8) 『文史資料選編』第26集，紀念“一二・九”運動五十周年特輯，北京出版社，1985年。
- (9) 『一二九運動回憶錄』第1集，人民出版社，1982年。

(10) 『一二九運動資料』第1, 2輯, 人民出版社, 1981, 1982年。

(11) 李昌等『“一二・九”回憶錄』, 中国青年出版社, 1961年。

第二章 天津及びその他の河北党組織

第一節 天津

天津の党組織は, 1934年に再び国民党の一斉検挙にあい, はば壊滅的な打撃を受けた。そのダメージは大きく, 1935年の「一二・九運動」勃発直前においても, 天津各校の党員はあわせてもわずかに6, 7名であったといわれている。市委員会はまた再建されていなかったのので, 個々の党員は連絡もとれず, 個別に活動していくほかはなかった⁽¹⁾。北方局(河北省委)は, 出獄してまもない彭真を党天津市委員会の再建のため派遣したとしているが, おそらく35年末か36年初めのことであったと思われる⁽²⁾。

天津における党再建の足掛かりをつくったのは, やはり抗日学生運動であった。35年の華北事件は天津における親日系新聞人の暗殺に始まった。秋には日本租界を基地とし, 関東軍や大陸浪人たちに唆された中国人による華北自治運動が繰り返される。天津の進歩的な教授や学生たちの間で, ひそかに抗日宣伝活動が行なわれ出した。

35年12月9日, 16日の北京における二度の大デモンストレーションはただちに天津に波及した。最初に動いたのは, 天津法商学院で教えていた阮慕韓, 楊秀峰, 温健公といった進歩的教授たちであった。前述したように彼らは特科系統の党員であった⁽³⁾。彼らは秘密裏に天津各校の抗日分子と連絡をとり, 抗日宣伝活動を推し進めていた。北京で「一二・九」, 「一二・一六」に参加した楊, 温らは, かねてより彼らと連絡しつつ抗日宣伝活動をしていた学生党員朱紀章(朱光), 郝金

貴(ともに天津法商学院)などと相談, 12月18日, 北京に呼応し抗日デモを敢行する。

そのデモの後, 朱紀章はようやく李鉄夫(「李鉄夫批判」に晒されていた李鉄夫)に会い, 以後天津市委の指導を受けるように彼から指示されている⁽⁴⁾。12月28日, 朱光などの活動により天津学聯が結成される。実のところ, 楊, 温と朱光たちは, いずれも党員であったが, 天津の抗日学生運動についての彼らの相談は, 党員として話を進めたのではなかった⁽⁵⁾。党員といっても組織系統が違えば, 進歩的な教授とその授業を受けている抗日派の学生として話を進めたのである。とくに, 秘密党員である楊や温は自分が党員であることを最後まで伏せていたと思われる。

34年以後, 批判の渦中にあった李鉄夫も, 一度切られた党組織との関係が, 35年末には連絡が辛うじて認められるようになっていた⁽⁶⁾。とはいえ, 彼に対する批判が終わったのでも, 処分が解かれたのでもなかった。だが, 李鉄夫はその夫人張秀岩とともに, 大衆運動にこだわり続けた。党との関わりが切れていた間(夫人は依然として党員であったが)も, 彼らは中華民族武装自衛会など抗日大衆組織の指導にあたり, 引き続きオルグ活動を行なっている。しかし, そこで彼らが獲得した大衆は, 党の組織関係に引き渡されるや, 彼らの手から切り離されていった。天津の「一二・一八」以後も, 李鉄夫はこれらと思う各校の活動家を集め, 学習会などを組織し自ら講義を買って出て, 学生たちのリーダーとして質を高めることに意を砕いている⁽⁷⁾。このような李鉄夫夫妻の活動が天津の「一二・九運動」に対しどの程度の影響力を及ぼしたのか定かではないが, おそらく彼の原則を貫いた身の処し方や労多く報われることのない活動が, 劉少奇の天津着任後, 高く評価されることになったのであろう。

このようにして始まった天津の運動が, 36年初めにはまだ北平のような分厚い中核部分を生み出

していなかったことは、北平学聯との合同で行なった「南下宣伝隊」への参加が、天津からはわずかに2、30人であったことからわかる。35年夏から運動を始め、多くの優れたリーダーを集めた北平の指導グループとは、まだ経験においても力量においてもやはり相当の差があったというべきであろう。

それに対し党側では、36年初めには出獄して間もない彭真が河北省委指導部に参加、2月には彭濤が天津に移ってきており、省委や市委は天津の学生工作にはある程度の指導力を持ちえていたのではと思われる。だが、朱紀章など天津学聯と天津市委の関係がどのようなものであったのか、明らかではない。天津の学生運動の指導者たちは、依然として楊秀峰、温健公、阮慕韓などの教授たちと緊密な連絡をとっており、おそらくは特科のネットワークを通じて、王世英、南漢宸などから、ある程度指導を受けていたと思われる。また、天津学聯は北平学聯と連合し平津学聯を結成し、天津学聯リーダーたちと董毓華など北平学聯のリーダーたちとは頻繁に連絡を取り合っていたが、そこから天津の学生運動は、河北省委や天津市委よりも、当時学生運動の最先頭に立っていた北平学聯のリーダーたちの影響をより強く受けていた可能性もある⁽⁸⁾。そのほか、独自に大衆運動に従事していた李鉄夫の影響も少なからずあったと思われる。

36年3月始め、劉少奇が天津に到着、北方局書記に就任する。北京における「三・三一」事件に対する批判を切っ掛けとして、劉少奇は北方局、北平、天津両市委の改造に着手する。北方局の組織部長には彭真を、宣伝部長には陳伯達を据え、秘書長には林楓を配したほか、天津市委の書記には李鉄夫を抜擢、副書記は易吉光であった⁽⁹⁾。彭濤も市委のメンバーに加わっている。

36年4月、天津学聯は天津学生救国連合会と改称する。後に、婦女救国連合会、農民救国会など

とともに、天津各界救国連合会をつくりあげることになる。

5月6日、冀察政務委員会との秘密協定により、日本軍は天津に進駐した。華北駐屯軍の誕生である。さらに日本軍により秘密工事に狩り出されていたと思われる労働者、農民の死体が海河に浮かんだことから、天津の民衆と学生の抗日意識は再び燃え上がった。2月下旬の国民党による平津学聯への弾圧以後、華北の抗日学生運動は一時停滞の止むなきにいたったが、この機を捉え、天津の学生運動はがぜん巻き返しをはかる。5月中旬、劉少奇の指示により、林楓は天津市委のメンバー易吉光、彭濤、李啓華らを天津郊外に集め、具体的な反撃に出ることを検討、5月末（五・三〇事件記念日）に再び抗日デモを挙行することを決定した⁽¹⁰⁾。5月28日、デモは決行され、沈滞気味であった華北の抗日学生運動に再び生氣をもたらしした。法商学院以外の天津各校に党支部ができ始めたのも、このデモの後のことである⁽¹¹⁾。

この時点の天津における党組織（北方局—天津市委）の指導体制の在り方が、その後の劉少奇の白区指導体制の雛型をつくったという点において、この天津の「五・二八」闘争は重要な意義をもっている。その指導体制は、従来の路線に批判的であり、極左路線から新しい路線への転換の意義を一早く理解した彭真、林楓、李鉄夫といったメンバーを指導部の中核とし、それに彭濤、周小舟、黄敬、董毓華、姚依林などの「一二・九」運動のなかから生まれた学生出身のリーダーたちを加えて形成されたものである。前者のグループには、北方特科の指導者王英世（北方局情報部長）、南漢宸のほか、同じく特科系統に属し、統一戦線工作に従事しながら、学生たちの抗日運動をひそかに援助してきた、大学に身を置くインテリ党员たち、徐冰、楊秀峰といった人々も含まれる。これらの組み合わせからなる新指導部にとり、2月下旬以来沈滞していた華北抗日運動に再び「かつ」

を入れることになった天津の「五・二八」闘争は、その最初の具体的な成果であった。

切札劉少奇を派遣し白区党再建に乗り出した陝北の党中央は、ここでようやく白区党再建の最初の足場を築く。しかも、このような党中央の地方党組織への指導の仕方は、従来のようにただ中央の命令とか威光によって組織を動かしたり、方針を押し付けたりするものではなかった。それは、情勢に見合った方針、大衆の雰囲気をつかみ、その士気を鼓舞する大胆な提起、そして参加者を納得させるだけの慎重な準備工作などが、運動を発展させ状況を新たに切り開いていくのだということを、従来のやり方を改めることができない幹部たちや、血気にはやりがちな急進的な学生たちに具体的な模範を示すことで理解させ、白区党内における北方局の権威を高めることに成功したのである⁽¹²⁾。北方局を中心に白区党の再建を進めるという陝北の党中央の方針は、その後いよいよ確かなものになっていく。

〔注〕

(1) 李啓華「一九三五年至抗戦爆発前後党領導下の天津学生運動」、『一二九運動回憶録』第1集，人民出版社，1982年，270頁。『一二九運動史要』，中共中央党校出版社，42頁。なお1934年の国民党の弾圧が何時ごろであったかについては、『天津学生運動史』（廖永武，天津人民出版社，1985年）などでもはっきり示されていない。

(2) 李啓華前掲文，271頁。姚依林「“一二九”運動回憶」、『一二九運動』，中共党史資料出版社，328頁。

(3) 『一二九運動史要』12頁。「温健公」、『南粵英烈伝』第1輯。

(4) 朱光「回憶天津“一二九”学生運動」、『一二九運動回憶録』第1集，302頁。

(5) 朱光前掲文。

(6) 董建中，張守憲，金了直「李鉄夫」『中共党史人物伝』第30巻，189頁。

(7) 董建中等前掲文。

(8) 庄林「在董毓華同志相处的日里」、『民族先烈董毓華』，北京出版社，1987年。庄林「我参加過的天津学生運動」、『革命回憶録』第20輯。

(9) 李鉄夫の天津市委書記就任について、劉少奇が任命したのか、それとも旧北方局が任命したのかについて、両説がある。董建中等前掲文は、1936年春、劉少奇の天津赴任後とし、李啓華前掲文は李鉄夫の天津市委書記任命と劉少奇の北方局書記を並列して書き、『一二九運動史要』（44頁）では、河北省委（旧北方局）の手によるものとしている。なお李鉄夫は37年5月、延安に赴き、党全国代表会議及び白区工作會議に出席したが、病弱だった（過去に肺病を患っていた）彼は、チフスに罹り、7月10日死亡した（董建中前掲文）。

(10) 何故、林楓のイニシアチブでこの天津市委の會議が行われたのかについて、二通りの見方がある。一つは、林楓がこの時期、天津市委の書記であったとする『一二九運動史要』の見方である。林楓は北方局秘書として北方局を代表して天津市委を招集したとするのは李啓華前掲文及び程宏毅，杜文敏，姜思毅「担負起天下的興亡——党在天津“一二・九”運動中的光輝業績」（『一二・九運動在天津』南開大学出版社，1985年）である。

(11) 李啓華前掲文。

(12) そこには、陝北の党中央は単に中央としての威光をかざし、地方党部を指導するといった従来のスタイルを踏襲できない事情も介在していた。当時、中国党の最も権威ある存在は、実はモスクワにいた駐コミンテルン代表団であり、その指導者は言うまでもなく王明であった。陝北の党中央としては、王明の帰国までに紅軍及び白区の党をしっかりと自分たちの側に結付けておかねばならない理由が存在していた。

第二節 その他の河北の党組織

河北省委は35年当時、白区党では最も多い党员

数を誇り、1千名以上を擁していたといわれている。冀東地区では33年の遷西暴動が地主武装の包囲に会い、失敗に終わった。続いて冀東地区では孫永勤の民衆軍が蜂起、後に中共の援助を受け、抗日救国軍と称し、日本軍に抵抗したが、35年に失敗、孫は戦死する。抗日救国軍を指導していた王平路を書記とし、35年冀熱辺特委（熱：熱河省）が成立する。だが、この時期の冀東党は引き続き組織を回復させていく途上にあった⁽¹⁾。また、冀中地区では、32年の高蠡暴動と保定第二師範学校闘争の敗北からまだ立ち直れないでいた。

河北省委の最大の拠点は、南部にあった。一般には直南（直隸南部）と呼ばれていたが、その地域は邢台以南のほか、黄河以北の豫北地方及び山東の濮県、范県、東明県などを含むかなり広い地域を指している。山東、河南兩省委が33年以後瓦解するか、活動の停滞を余儀なくされ、上記の豫北、魯西地区の幾つかの党組織が河北省委の指導範囲に繰り入れられることになったのである（34年11月、該地区は北部の冀南特委と南部の冀魯豫辺特委に分れる）。31年以後、直南では王明路線の下、磁県白龍廟暴動、濮陽姚家暴動など、幾つもの武装蜂起と紅軍結成が試みられてきたが、濮陽塩民暴動が農村大衆の支持を得て、一定の成果をあげた以外は、民団や地主勢力の夾撃に遇い、いずれも多くの犠牲者を出し、失敗に終わっている。34年には豫北地区の党組織が大きな打撃を受け、濮陽中心県委では多くの自首者を出している。

35年夏、河北省委は直南地区の党勢の回復を過大に評価し、再び武装暴動と紅軍抗日遊撃隊の結成をスローガンに掲げ、決起を促した。それには「北方の国民党軍を牽制し、紅軍の北上抗日を援助する」ためという理由も含まれていた。省委の責任者は直接冀魯豫辺区を訪れ、暴動の部署を指示し、遊撃隊を組織させ、さらにこの政治任務の完成を、冀南、冀魯豫辺の兩特委が競い合うよう提案した。当時、省委代表として、冀南、冀魯豫

辺の兩特委の指導に当たっていた黎玉は、敵と味方の力の差が余りにも大きく、さらに近年の武装暴動の失敗より党組織がまだ立ち直っていないことなどを述べ、武装暴動に疑問を呈したところ、批判を浴び、省委代表の職権を取り消されている。

35年7月、冀南暴動が勃発する。飢えに喘ぐ農民を結集し、暴動は冀南から冀魯豫辺（沙区）に波及し、中国工農紅軍平漢線遊撃隊、華北抗日討蔣救国軍第一軍第一師（師長劉子厚）など幾つかの遊撃隊を作り出し、7ヶ月余りにわたりゲリラ闘争を続けたが、地方軍や民団に包囲され、敗北した。36年春、姿を暴露させた党組織は国民党に狙い撃たれ、冀魯豫辺区の指導者であった王從吾、張増敬らが相次いで逮捕され、党組織は再び大きなダメージを受ける⁽²⁾。

この冀南暴動は典型的な王明路線下の農民暴動であった。一般に行われた闘争のスタイルは、吃大戸、分糧或いは借糧闘争と呼ばれたが、飢えに苦しむ農民を農会、窮人会、好人会などに組織し、それらを率い夜半に官紳、地主、富農の家に押し入り、倉を開け、麦や米、或いは衣服を奪い取ったり、豚や鶏をつぶし皆で食べたりするものであった。官紳や地主の銃を奪い、農民を武装させるのも、重要な闘争目標の一つであった。このような闘争スタイルは、折りから破綻した農村経済の下で、飢えに苦しむ農民や、黄河氾濫により難民化した被災民に歓迎され、農民の士気を大いに高めた。それは華北農村だけではなく、全国の貧しい農村のいたるところで行われていた、言わば伝統的な農民闘争のスタイルであった⁽³⁾。

だが、このような戦術には致命的な欠陥があった。吃大戸、分糧といった闘いにより、農民は一時的には飢えはしのげても、すぐさま官紳地主らの武力によって鎮圧される結果となった。冀南暴動のように、党の組織的な指導や、多少の遊撃隊が存在したとしても、事態はそれほど改善されなかった。三十年代の極左路線においては官紳、地

主ばかりか、富農をも攻撃の対象にしたことによって、富裕中農まで不安に陥れることになった。黎玉の回想では、冀南暴動ではしばしば統制を欠き、土匪と変わらぬような行き過ぎも行われたとある。おそらく盗みかっぱらいの類や、人質を取り身の代金を奪うような、過去の飢餓農民や野盗の群れと同様な行動も少なからず行われたのであろう。

富農や富裕中農までもが敵に味方し、貧農や雇農の動きを監視したり、自分たちの子弟を民団、保安隊といった反動武装勢力に送り込むようになっては、党であれ遊撃隊であれ農村で自由に活動することはおろか、部隊を農村のなかに隠すことも不可能になった。飢えた農民たちは果敢に闘ったとしても、次から次へ農村各地を流動するだけで、拠点を築くことさえできず、保安隊や警察局などの地方の治安部隊によって鎮圧されるはかなかった。冀南暴動は規模が比較的大きかったとはいえ、宋哲元や商震の数個師が出動するに及び、遊撃隊

は一掃され、殺害されたもの2千名とも言われるほどの多くの犠牲者を出し、闘争は失敗に終わった。

36年春、陝北から劉少奇が派遣され、北方局書記に就いてから、黎玉は処分を解かれ、山東省委再建のため、済南に赴く。以後、河北省委は吃大戸、分糧闘争といった闘争を放棄し、農村党組織の回復にあたる。

〔注〕

- (1) 李運昌「憶抗戦初期的幾位朋友」、『河北革命回憶録』第2輯、河北人民出版社、1980年。
- (2) 劉棟「冀南暴動親歴記」、『河北文史資料選輯』第2輯。蘇博光「冀南春雷——冀南暴動片断回区」、『河北革命回憶録』第1輯。
- (3) 黎玉「中共直南特委工作回憶」、『中共冀魯豫辺区党史資料選編』第1輯、上冊、山東大学出版社、1985年。

お 知 ら せ

中国語をこれから勉強しようとお考えの方、および中国語学習経験者で学校の選択に迷っている方を対象に、本校の教学内容、方式等についてご理解いただくために学校説明会、無料公開講座を催します。お気軽にご参加ください。

- 学校説明会 3月18日(土)午後2時～4時
* 昼間部入学希望者対象
- 無料公開講座 3月29日(水)、3月30日(木)
午後6時20分～8時30分
* 夜間部入学希望者対象

〔場所〕本校教室(3階) 〔参加費〕無料

◎電話 あるいはハガキでお申込みください。

(社)中国研究所 中国語研修学校
東京都千代田区飯田橋1-12-12

☎ 03(261)6298

<お知らせ>中国政治体制改革研究会

中国経済体制改革研究会の陳一諮所長(政治体制改革研究会副会長)と同研究所の高山特約研究員が来日されました。

お二人とも体制改革の第一線で活躍されている研究者で、陳所長は政治体制改革、高研究員は農業問題を専門とされています。お二人から中国研究所を訪問したいとの連絡がありましたので、この機会にいろいろ話題の多い中国体制改革の現状についてお話をうかがうことにいたしました。

日本側講師としては、粕谷信次法政大学経済学部教授を予定しております。下記の要領で開催いたしますので奮ってご参加下さい。

*会場準備のため事前にご連絡戴ければ幸いです。

日時=3月3日(金)午後2時～5時

場所=中国研究所

会費=所員700円、一般1,500円。

研究会員・学生 500円。